

日本主義 に關する 問に答ふる 雜話

陸軍歩兵少佐 山 腰 明 將

日本が世界萬邦に比類の無い獨特の光輝ある所以の一つは申すまでもなく臣民が天皇中心主義であることであります。然らば此の天皇中心主義を實現する爲に國民が如何なる手段を取り、また如何なる社會機構が實施されてゐるか云ひますと、疑問が色々起つて、大いに考へさせられるのであります。天皇中心主義を口先ばかりで唱へてゐては何にもなりません。天皇中心主義を押賣りしたり、天皇の御名に隠れて自己の所説を強ひたりする様な事實がありますまいか。天皇中心主義が眞に天皇中心になる爲には、先づ何よりも神勅詔勅の意義を明瞭に認識する必要があります。殊に明治天皇の御製は、其の中に天皇の思召をはつきりと仰せ出されてありますから、この思召をしつかりと體得した上で、生命を屠して是を翼賛し奉る。ここに眞の天皇中心主義が存する事と存じます。

皆様も御同感の事と存じますが、御製に現はれた天皇の御心盡しは實に到れり盡せりでありまして、社會萬般の事に就

き各方面に亘つて御遺訓を垂れさせられて居られます。それで思想問題などと云ふ事も、たゞ天皇の御製を體得し、奉戴し、是を實施しさへすれば、萬事解決する事でありまして、これに就て我々が此處で喋々説明を試みましても、其の萬分の一を盡し得ぬ、至つて廣い深い奥底識れぬ微妙な所まで穿たれて居ります。御製に就ては、大正五年、聖旨を奉じ、同八年編成奏上に係はる、宮内省藏版、文部省發行の、明治天皇並びに昭憲皇太后の御集が有しまして、斯道に志す人は是非共左右に供へねばならぬ書であります。此の御製集さへ供へず、拜讀せずして天皇中心主義を唱へて見た所で、結局觀念の遊戯に終りはしますまいか。

御製を拜しますと、天皇は國體の根本原理に別け入つて御述懐遊ばされてありますが、其の御體験、御蘊蓄の深さは、比較申上げては畏多い事ですが、舊幕時代以來の國學者、本居、平田、或は大國隆正、玉松操等諸氏の境地などと到底比較にならぬ程の差がありまして、御製に對する理解

が進めば進む程、愈々以て神そのものゝ御性格が、益々明に
拜察し得らるのであります。

敷島の道を究める系路は即ち明治天皇御思索の過程であり
ます。乃で天皇の此の御思索の跡を辿り、此の一筋の敷島の
道と云ふ系路を歩むと云ふ目的で、全國民が一致した歩調を
取りさへすれば、其の間に賢愚や氣根の差はあつても、思想
統一は極めて容易に成就致します。然し乍ら此の唯一の系路
を辿らうとせず如何程教育普及に努め、天地宇宙を論じて
見た所で甲論乙駁、決して歸趨する所は判りますまい。そこ
でこれから少しく御製の内容、敷島の道に就て申上げる事と
致しませう。

我が日本は神立立憲君主政體であります。天皇專制政體で
もなければ、民主政體でもありません。民主政體でない事は
誰でも判つてゐる様ではありませんが、それにしても與論々々
と云つて、與論即ち多數決で國政を切盛りしやうと云ふ傾向
が多分にあります。是を左翼思想——民主主義と云ひませう
か。又天皇專制政體と云へば所謂右翼思想になります。此の
思想によると時の權力者が天皇の名をだしにして色々自分
勝手な制度を作り出す恐れがありますから、これも結局上部
階級の民主思想——官僚主義であると云ふ事になります。然
るに我が日本では天皇も決して自分勝手に事は行はれませ
ん。皇祖皇宗が遺し給ふた惟神の大道を天皇御自ら奉戴翼賛
追求し、それを御實施遊ばして行くのであります。其の證據

には明治天皇は憲法の御告文の中に斯く仰せられてありま
す。

皇朕レ天壤無窮ノ宏謨ニ循ヒ惟神ノ寶祚ヲ承繼シ舊圖ヲ
保持シテ敢テ失墜スルコトナシ

即ち此の中に舊圖と云ふ事が明に示されて居ります。また

茲に皇室典範及憲法ヲ制定ス惟フニ此レ皆

皇祖

皇宗ノ後裔ニ貽シタマヘル統治ノ洪範ヲ紹述スルニ外ナ
ラス而シテ朕カ躬ニ逮テ時ト俱ニ舉行スルコトヲ得ルハ

洵ニ

皇祖

皇宗及我カ

皇考ノ威靈ニ倚藉スルニ由ラサルハ無シ

と示されてあります。即ち我が日本には統治の洪範が根本に
神代ながらに存して居りますもので、此の洪範を時勢の進運
に準じて紹述せられたものが即ち憲法であります。而して此
の皇祖皇宗の統治の洪範こそ、神立立憲君主政體の最高の永
遠の規範であるのであります。そして此の統治の洪範を基本
にして今日の左右兩翼や外國思想の問題を取扱はうとしない
爲に、ともすれば論議が枝葉に迷ふと云ふ弊に陥るのであり
ます。天皇の御製に

葦原のみづほの國の萬代もみだれぬ道は神ぞひらきし

とありますのは、此の根本の洪範が太古皇祖の神によつて明

にせられた事と拜誦致します。

かみつ代のことをつばらにしろしたる書をしるべに世を治めてむ

これは神代の事を記した記事、記録を元として世を治め給はんと云ふ御意志と拜します。

かみつよの御代のおきてをたがへじと思ふぞおのがねがひなりける

神代よりうけし寶をまもりにて治め來にけり日のもとつ

國

世はいかに開けゆくともいにしへの國のおきてはたがへざらなむ

天皇が如何に皇祖神代の道を奉戴翼賛し給ふて在られたか、右の御製で明に拜察出來ます。然らば次に此の統治の洪範と一體如何なるものであるか、其の内容の問題に觸れて見なければなりません。それは日本の國の捷の根本問題、日本の骨組、天壤無窮の原理であります、是に就ては

さだめたる國のおきてはいにしへの聖の君のみこゑなりけり

と云ふ明確な御指示があります。御聲即ち御言葉でありますまた此の御言葉に就ては

天地もうごかすばかり言の葉のまことの道をきはめてし

がな
天地もうごかすといふことのはのまことの道は誰かしる

らむ

とある如く、國の捷は聖の君の御聲、即ち言の葉のまことの道であるぞと仰せられて居るのであります。

白雲のよそに求むな世の人のまことの道ぞしきしまの道いとまあらばふみわけて見よ千早ぶる神代ながらの敷島の道

惟神の道は敷島の道であり、また誠の道、言の葉の道と云つても、いづれも同じ事であります。そしてそれは古の聖の君の捷でありますから、此の所のけぢめをはつきりさせて、着眼點を誤らぬ様にせねば本當の道は出て來ないのであります。然らば此の敷島の道は何處にどう求めたらよいか、古の聖の君の御聲は如何なる書物を調べたら判るのでありませうか。

いそのかみふるごとぶみは萬代もさかゆく國のたからなりけり

石上ふるごとぶみをひもときて聖の御代のあとを見るか

な
申す迄もなく、ふるごとぶみとは古事記の事であります。こ

のふるごとぶみ（古事記）こそ言の葉の誠の道が記された世の寶であるのであります。一體古事記に言の葉の道などが書いてあるのかと疑問を持つ人もありませんが、此の點に着眼してかからねば古事記は讀めません、古事記を荒唐無稽な神話や、野暮時代の記録でよもある様にしか解する事の出來ぬ

のは此の着眼點を誤つた結果であります。故に此の言の葉の道と云ふ正しい着眼點に立脚して、古事記を其の序文から始めて、丹念に一字一句を落さず追求して參れば、やがて敷島の道が現前して來るのであります。然らば敷島の道とはどんなものでありませうか。

言義の解釋をして行きますと、シキンマのシは至であり、死であり、到り止まる事であります。キは息（イキ）のキであります。息（呼吸）が言葉に現はれて全宇宙に徹底する迄には八百萬の言葉、即ち八百萬の神があるのであります。此の八百萬の言葉の中で最も至つた基本の音が五十あります。これが即ち日本語の五十音であります。敷島をまた磯城島と書きます。磯は五十（イソ）の事であります。この五十音を以て宇宙の森羅萬象何事でも残る隅なく云ひ表はす事が出來ますから、それは最も基本になる堅固なものであると云ふ所から、之をまた石と漢字に宛てます。石上神宮の石（イソ）も勿論此の五十音の事から出て居るのであります。

次に更に「島を敷」いてある現實に就て申し加へますればそれは豐葦原瑞穗國の十四島となります。古事記の伊邪那岐美兩神の島生みの所に現はれます島の名が、第一に淡道之穗之狹別島、次に伊豫の二名島、次に隱岐の三子島、筑紫の島伊岐の島、津島、佐度の島、最後に大倭豐秋津島、以上八島を大八島國。さて後還りました時に生み給ふた島は、吉備兒島、小豆島、大島、女島、知訶島、最後に兩兒島の六島。以

上を合計しますと十四島となつて居ります。この十四島トの原理が言の葉、思想構成の原理であります。此の十四島に五十音夫々の縮り、思想構成要領夫々の島しまりを付け、八百萬宇宙間萬有に夫々名前を付けられ、且つ物の構成法を表示されたのであります。

古事記の序文に「夫れ混元既に凝りて、氣象未た效ちかれず、名も無く爲も無し、誰かその形を知らむ」とあります通り物事の抑の初まりは名（言葉）であります。皇祖伊邪那岐命は此の言葉の根本哲理を發見せられて、萬物に御銘名を遊あそびました。惟神の大道、即ち言の葉の道、誠の道は此處から出發して居るのであります。此處を出發點とし、此の見地に立つて古事記を讀んで行かないと、明治天皇の恩召の様な道の本體は現れて來ないのであります。

人なみにふむとはすれど敷島の道の廣さにまどひぬるかな

是は昭憲皇太后の御歌であります。此の御歌の如く、大は宇宙銀河系、太陽系、地球の事より、小は身體の事、細胞の事、原子、電子の事に到るまであらゆる部門に當て放つて其の悉くを説明し得るのが敷島の道であります。此れ程廣大な道は決して他にありません。其の奥底の深遠なる亦測り識れぬものがあります。今日我々が此を研究するには次の様な豫備知識を研いて岐け入ると、都合よい速道はやみちと思ひます。

(一) 明治天皇御製の中の、國體に關する部分の研究

(一) 世界萬教の根本は一つであつて、それは悉く我が惟神の大道より派生したものであると云ふ認識

(二) その惟神の道の精髓としこの百神の個性の體得。此の百神と云ふのは古事記の天御中主神より須佐之男命に到るまでに御生になつた神、但しその中より八雷神を除きますときつちりと百神になります。

(四) 御鏡(八咫鏡)の御本質、即ちその内容が言靈でありその御本體が言靈を組織した音圖であると云ふ事の把握凡そ以上の理解の準備から進んで行くと、結局古事記が解せらるる様に存するのであります。明治天皇様も非常に御苦心遊ばされまして、斯道の奥底を探求せんと、一方ならぬ御努力ありし事を御推察申し上げ得らるるの、次々の御製に觀ても明かな所であります。

明治三十六年

ことのはの道のおくまでふみわけむ政きくいとま〜に

明治三十七年

ちかひたるおのが心をしをりにて誠の道をわけつくして
む

前に申上げました様に天皇は在來の神道家、國學者の域を遙に超絶して深く惟神の道に分け入られた大聖人に在りました故に、當時天皇が斯道の師として指導を求めらるべき人物がありませぬ、それで他に訊ねても判らぬから、御自身の決心一つを枝折りにして、此の道を究めやうと云ふ御決意を歌は

れた御事、まことに畏き極みであります。

明治四十年

石上ふるき手ぶりもとひてみむ物しる人を尋ねいでつ

明治四十三年

ききしるはいつの世ならむ敷島のやまと詞の高きしらべ
を

明治四十五年

ともすればさまたげられて一筋にゆかれぬものは道にぞ
ありける

ききしより遠しと思ふはゆくさきに心のいそぐ道にぞあ
りける

敷島のやまと心をうるはしくうたひあぐべきことのはも
がな

なすことのなくて終らば世に長きよはひをたもつかひや
なからむ

これは崩御の御年であります。此の御製は何と云つてよいか申上げる言葉のない畏き極みであります。日本人たる者一人として晏如としては居られません。

以上申述べました明治天治御製の御導きを服膺して、敷島の道、惟神の大道に全國民が歸一して、更に其の奥の奥を深く追求して行く事が刻下日本の急務であります。幸なことに、此の様な困難な荆棘の道である惟神の道も追求さへして行けば、今ではもう判る世の中になつて居ります。何故かと

申しますと、明治時代に比べて科學が遙に進歩して、事理が大層明瞭になり、ラヂオ、トーキー、テレビジョンも發明され、近代科學は光波、電波、熱波、音波等、振動數や波長によつて數量的に計算し得る様にしてしまひました。皇祖が哲理で開發せられた道も、今日では事實の證明で鈍なる吾人の耳目に示さるる事になりました。科學は此の上なき皇學原理の傍證物でなければなりません。是等の科學原理を一面に充分に認識しつつ、思索追求してさへ行けば、皇祖神代の言葉の誠の道も、容易に明にする事を得るのであると存じ、そして其の道の赴く所、天皇の御稜威によつて、世界の眞の平和の時代を實現しなければならぬのであります。以上説明の足らざる所、御理解に満たざる點は御遠慮なく御質問願ひます。以下問答……(一二・九・二二・夜、神代史實研究會席上にて速記)

報 告

山腰少佐は今回應召せられ、訓育愛撫せられた部下將卒を尉いて、部隊長として勇躍戦地に赴任される事となりました。今日迄日本主義の論戰に奮はれた十拳劍の運用を、實戰の彈雨の中に試みる事もまた快事とせられる事と存じます。謹んで武運長久を祈ります。

神と電波

現象論(天津金木學)に關する限り、神と云ふ事は電波及びあらゆる放射能を意味するものと云ふ事が出來やう。科學が發達しなかつた時代の素朴的、觀念的現象論に於て、人間の體驗、即ち鋭敏な五官と云ふ受信装置によつてキャッチされた微妙な空中電波や人間の思念波を捕へたものを、神(雷神)と稱してゐた。科學は斯の如き觀念論的神を、有に即して捕へる事が出來たのである。ガルバノメーターに感する電流も、乃至冥想中の人間の髪の毛や手足の爪の間から受信發信される所謂靈の動きなるものも、結局は同じエーテルの波動である事を承認する事を、今日の神秘家達が躊躇してゐる事はどう云ふ理由か、殊更に神秘を掲げて飯の種にする爲だらうか。物と云ひ心と云つても、それは物と觀じ、心と觀する觀方の立場の相違に外ならない。科學と云ふメソヂストフエレスは結局神の最もよきクネヒトである事が判らないなら、全日本神道神秘家達は、ゲーテのファウストでも讀んで出直し來たらよからうと思ふ。開津島には何等の神秘も秘密も包藏されぬ筈である。